

【心理学科心理学専攻（専門：一般心理学コース）解答例と出題意図】

【共通の出題意図】

問 1

本設問は、受験者の基礎的な心理学専門用語に対する幅広い知識を測ることを目的としている。特に、入学後の講義や実習で円滑な学びを得る為に必要な知識の中から、特定の分野に偏らないように設問を設定している。

問 2

本設問は、特定の心理学のテーマについて深く理解し、それを言語化・文章化する能力があるか測定することを目的としている。特に、入学後の講義や実習において必要なディスカッションスキル、レポート作成スキル、論文作成スキルの素養を評価することに焦点が当てられている。

問 1 解答例

- ① アタッチメント（愛着）
- ② コンピテンシー
- ③ レジリエンス
- ④ 軸索
- ⑤ 刺激般化
- ⑥ 心理教育
- ⑦ 徹底操作
- ⑧ リエゾン精神医学
- ⑨ ディスカリキュリア、dyscalculia
- ⑩ 非機能的思考記録表

問 2 解答例と出題意図

- ① 【解答例】 ビネーとシモンは 1905 年、判断、理解、推理という複雑な精神機能を測定する 30 項目の問題を困難度順に並べた事実上最初の知能検査を発表した。1908 年に 3 歳から 13 歳までの年齢段階に割り当てられた 58 の問題項目の尺度に改訂され、精神年齢という概念が初めて用いられることとなった。問題の通過率により、その子どもが、どの年齢段階に相当するかという精神年齢を決定し、知能を表すものとしたのである。

その後、1916 年にアメリカにおいてターマンがシュテルンの示唆に基づいて知能指数を用いた初め

てのスタンフォード＝ビネー知能検査を作った。知能指数（Intelligence Quotient：IQ）は、ビネーの考案した精神年齢を生活年齢により割ったものを 100 倍したものであり、比率 IQ と言われる。その後、スタンフォード＝ビネー知能検査は、1986 年の改訂において、これまでの比率 IQ を用いる方式から、ウェクスラー式知能検査と同じ偏差 IQ、すなわち同一年齢の母集団における成績の相対的位置を示す標準得点を求めるものとなったのである。

【出題意図】心理学において重要な「知能指数」という概念が、どのように考案され、使用されてきたのかについて、きちんと理解していることを知るための問いである。

- ② 【出題意図】本問は、近年の産業・組織心理学において重要な概念である「心理的安全性」について、その意味や機能を理解しているかを確認するとともに、組織における具体的な課題と関連づけて論理的に考察する力を評価することを目的として出題した。解答においては、心理的安全性が低い職場で生じうる問題（例：意見表明の抑制、情報共有不足、学習機会の減少、ミスの隠蔽など）について説明したうえで、それらが組織やチームに及ぼす影響を論じることが求められます。また、リーダーに求められる働きかけとして、メンバーが安心して発言・相談・挑戦できる環境づくりや、日常的なコミュニケーションの工夫などについて、具体的な職場場面を想定しながら説明できることを期待した。
- ③ 【出題意図】この問題では、Dark Triad に含まれる 3 つのパーソナリティ特性（マキャベリアニズム、サイコパシー傾向、自己愛傾向）を正しく挙げられるかを確認する。その上で、これらに共通する特徴（例：冷淡さ）を理解しているか、さらに各特性の顕著な点に基づき、それぞれの独自な特徴を区別して指摘できるかを評価している。
- ④ 【出題意図】本論述問題は、神経心理学の研究領域に関する基礎的な理解を確認するとともに、それらを体系的に説明する論述能力を評価することをねらいとして出題した。神経心理学の研究対象については、脳損傷後の高次脳機能障害を主要な研究対象とすることをおさえたうえで、近年における研究対象の広がりについての言及があることが望ましい。一方、神経心理学の目的に関しては、基礎心理学的観点と臨床心理学的観点の双方から多面的に把握しているかを評価する。後者については、高次脳機能障害の臨床において心理職に期待される役割についての言及があることが望まれる。
- ⑤ 【解答例】それまでの心理学は意識経験を主題とし、内観を主な研究方法論としていた。しかしそのアプローチは、客観性と実用性の点で問題があった。Watson, J. B. の行動主義とは、心理学の主題を意識経験から行動へと、主な研究方法論を内観から刺激と反応の観察へと変え、そして心理学の目標を行動の予測と制御に定める考え方であった。
- ⑥ 【解答例】中心極限定理とは、母集団がどのような分布に従っていても、その母集団から無作為に抽出した標本の大きさ（標本サイズ）を十分に大きくしていくと、標本平均の分布が近似的に正規分布に従うようになる、という定理である。母集団が正規分布でなく、歪んだ分布や一様分布であっても、標本サイズを大きくすれば標本平均の標本分布は正規分布に近づく。このとき標本平均の分布の平均は母平均に等しくなり、その標準偏差（標準誤差）は母標準偏差を標本サイズの平方根で割った値となるため、標本サイズが大きいほど標本平均は母平均の周囲に集中する。この定理は、母集団分布が未知あるいは正規分布でない場合でも、標本平均を用いた区間推定や統計的仮説検定において正規分布に基づく手法を適用できる理論的根拠を与える点で重要であり、心理学における推測統計の基盤となっている。